大淀川 水質改善兆し

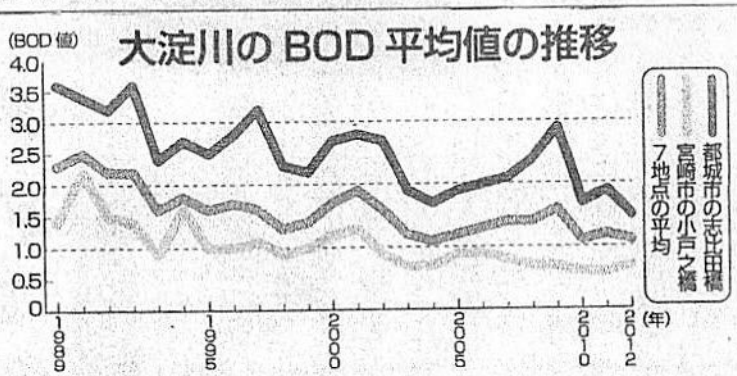
官民20年の取り組み成果

特報インサイド　みやざき

宮崎市や都城市を流れ、流域人口約60万人を抱える大淀川（総延長約107キロ）の水質が改善の兆しを見せている。水質環境の目安となる生物化学的酸素要求量（BOD）の2012年の平均値は1リットル当たり1・1ミリグラムで、清流といわれる五ケ瀬川の1995年当時に近いレベルに戻った。91年に九州20河川（当時）で汚濁度ワースト1になってから20年余り。官民挙げて取り組んだ成果が表れ始めている。

国土交通省宮崎河川国道事務所によると、大淀川の水質は上流域4カ所、下流域3カ所で調査し、BODは2010～12年に3年連続で環境基準を達成した。これまで、上流域では家畜排せつ物の処理や生活排水対策が遅れ、特に都城市の志比田橋付近の汚濁の度合いが高かった。高度成長期の昭和40年代には環境基準の3ミリグラムを大幅に超える5～6ミリグラムのこともあった。以後、公共下水道や農業集落排水処理施設、合併処理浄化槽の整備が進み、次第に低下したものの、1989年と92年には3・6ミリグラムの高い数値を示していた。

「91年に九州ワースト1になったことが、流域住民にとって大変なショックだった」。大淀川の水質浄化に長年取り組んでいるNPO法人大淀川流域ネットワークの杉尾哲代表理事は話す。これ以降、大淀川の水質浄化の機運はさらに高まり、家庭からの生活排水の削減呼び掛けや、家畜排せつ物法施行により、家畜のふんの適正処理も行われるようになった。

こうした努力が実を結び、91年から10年後の2001年に同橋付近のBODは2・8ミリグラムに低下。近年は10年に1・7ミリグラム、11年1・9ミリグラム、12年に1・5ミリグラムと徐々に改善傾向にある。ただ、清流の目安でもある0・5ミリグラムにはまだ隔たりがある。関係者はさらなる取り組みが必要と訴える。

9面に続く